日印 望まれる広範な交流

〝脱〟経済偏重、知的レベルも

故ボースらが築いた日本への信頼に応える番

金子熊夫

「ネタジ」(指導者)――インドでガンジーやネルーと並び、今なお多くの人々に追慕されているスバス・チャンドラ・ボースの敬称である。

英国の植民地支配を打倒するため、一九四一年一月カルカッタを単身国外脱出、シンガポールで「インド国民軍」(INA)を結成、一九四三年十一月東京で大東亜会議にも出席したが、日本降伏の三日後、台湾で飛行機事故のため、雄図空しく客死したと伝えられる彼の、文字通り波乱万丈の生涯は、年配の日本人ならよく記憶していよう。

ただし、インドでは、彼の死亡は偽りで、今でもどこかで生存していると固く信じている人が少なくなく、そのため、彼の「遺骨」は東京・杉並区の蓮光寺に保管されたまま、いまだに母国に引き取られていない(この辺の事情は、十月二十四日付本紙夕刊でも詳しく紹介された)。

私は、九月下旬、国際交流基金の助成を得て、外交講演のためニューデリーに一週間出張した帰途、カルカッタに立ち寄り、ネタジの生家・記念館を訪問した。甥(おい)のシシル・K・ボース氏が館長を務めるこの記念館には、ネタジの部屋が当時のまま保存され、自筆の日記、書簡、演説草稿など貴重な資料が多数展示されている。ただ、財政的な制約からか、保存状態はお世辞にもよいとは言えない。

館長によれば、明後年一月のネタジ生誕百周年を機に、展示を大幅に拡充すると共に、ネタジとその時代に関する歴史研究、さらにはアジア太平洋の政治、外交、経済、文化、環境問題など広範な学術研究交流の場として、「ネタジ国際交流センター」(仮称)の建設計画が進んでいる。

このため日本にも、財政支援を含め積極的な協力が期待されており、現地の日本大使館や総領事館も、できる限り前向きに対応するとしているが、インド側の熱意に比べると、日本側の反応は、今一つ盛り上がりに欠けるようだ。

確かに、ネタジの行動や業績については学術的に未解明の部分が少なくなく、日本との関係についても、太平洋戦争自体をどう見るかによって、当然評価が分かれる。

しかし、思うに、ネタジは、必ずしも日本の「大東亜共栄圏」思想に全面的に共鳴して共に戦ったのではなく、祖国の自由と独立のために、日本やドイツの力を利用しようとしたのであろう。非暴力・無抵抗を旨としたガンジーやネルーとは方法論こそ違え、当然祖国の命運を第一に考えたはずだ。だからこそ、今でもインド国民の根強い尊敬を勝ち得ているのである。

翻って、近年の日印関係は、先方からは、首脳の来日が比較的頻繁なのに、我が方からは、一九八七年の倉成外相訪印以来八年も外相レベルの訪問が途絶えていることから明らかなように、決して緊密とはいい難い(その後九〇年に海部首相、本年一月に橋本通産相がそれぞれ訪印したが)。

他方、長引く円高不況の中でアジア進出に活路を探る日本企業は、最近とみにインド市場への関心を高めつつある。投資額ではまだ第六位だが、今後着実な増加が見込まれている。片や、従来ソ連寄りだったインド側も、冷戦終結以後は、西側先進諸国への接近を強めており、日本への期待は極めて高い。また今後、二十一世紀のアジア太平洋の安全保障体制を模索する上でも、日印関係は、日本にとって、もう一つの重要な視点であろう。

ただ、日本の対印関心がもっぱら経済面に集中し、政治、文化面を含めた知的レベルの交流が著しく欠けているとの不満が、インドの指導層に蓄積しているのを、私は今回の訪印でもつよく感じた。

かつて「アジアは一つ」と喝破した岡倉天心と意気投合して、日印友好を力説した詩聖タゴール、東京裁判でただ一人「日本無罪論」を主張したR・パール判事、そしてネタジ・チャンドラ・ボース。これらの傑出したインド人が命懸けで築き、今日に引き継いできた日本への信頼と期待に、今度は私たち日本人が誠意をもって応えるべき番ではなかろうか。

(東海大教授・国際政治学、元外交官)

インドで今なお多くの人々に追慕されている「ネタジ」(指導者)の故スバス・チャンドラ・ボース